

小学校教師の力量形成に関する省察<sup>†</sup>  
—教員養成カリキュラム評価のための基礎的検討—

丸山 剛史\*・平野さや香\*\*  
宇都宮大学教育学部\*  
栃木県公立小学校\*\*

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第4号 別刷

2018年2月28日



# 小学校教師の力量形成に関する省察<sup>†</sup>

## —教員養成カリキュラム評価のための基礎的検討—

丸山 剛史\*・平野さや香\*\*  
宇都宮大学教育学部\*  
栃木県公立小学校\*\*

本稿は、大学教員養成カリキュラム評価のための基礎的検討である。本稿では、教職就職6年目の小学校教師に、大学における教員養成に留意して、小学校教師の力量形成過程に関して省察を試みてもらった。その結果、大学時代は学校教育に関する基礎的な概念や専門用語を、時間をかけて学び、わがものとしていくが、なかには不登校や発達障害のように教職就職後すぐに効力を発揮する内容も含まれていたことがわかった。教員養成カリキュラム評価の調査を行う際には、高等学校卒業生が教職就職に至るまでの変化を把握し、そうした変化を的確に掬い取ることができるような枠組みを設定する必要があることも確認できた。

キーワード：教師の力量形成，教員養成カリキュラム，カリキュラム評価

### 1. はじめに

本稿は、教員養成カリキュラム評価の事例研究のための基礎的検討として、教職6年目の小学校教師に小学校教師としての力量形成に関する省察を試んでもらい、それをもとに大学の教員養成カリキュラム評価のためのアンケート作成の留意事項に関して若干の考察を試みようとするものである。

教師の力量形成は教師のライフコース研究等において検討されてきたが<sup>1</sup>、大学の教員養成カリキュラムとの関係を問う視点が弱いことが指摘されている。

筆者（丸山）らは現在、宇都宮大学（宇大）教育学部・教員養成課程の教員養成カリキュラム評価に関する調査を準備しており、今回はアンケート項目作成のための基礎的検討として教職に就いた卒業生に、大学の教員養成が果たす役割に留意してもらいながら教師としての力量形成の過程を振り返ってもらった。今回は小学校教師の卒業生を対象とした。

こうした省察を依頼した理由は、卒業生は、1) 小学校教員としてどのような力量が必要であると考

えているか、2) そうした力量はどのようにして形成されたと考えているか、3) 大学の教員養成との関係はどのように捉えられているかについて素朴に問うてみたいと考えたからである。

ただし、教師の力量形成を意識したことのない教師に省察を試みてもらう場合、参考にすべきものがなければ書きにくいであろうと考え、山崎準二編著『教師という仕事・生き方 第2版』、今津孝次郎『教師が育つ条件』の2冊を読んでから文章にまとめてもらった。教職6年目の平野さや香教諭（以下、平野）に依頼したが、平野に依頼したのは平野が産前休暇に入り、自身のこれまでを冷静に振り返る時間的余裕ができたためである。また、先行研究においても出産を契機に教師の教育観が変化すると指摘されており、平野にとっては小学校教師としての力量形成を考える好機となると思われたからである。

以下、小学校教師としての力量形成の過程に関する記述は平野が執筆し、丸山が調整・修正を施した。

### 2. 大学生生活

#### (1) 大学での講義

宇大教育学部では、小学校と中学校の教員免許状取得が義務づけられていた。小学校各教科（初等国語や算数、理科など）の講義では、教え方や教育に関する専門用語を学んだ。「教科・領域」、「指導」、「評価」、「授業づくり」など高校生までは聞き慣れない

<sup>†</sup> Tsuyoshi MARUYAMA\*, Sayaka HIRANO\*\*:  
Elementary school teacher's reflection on  
professional development

Keywords: teacher's ability formation, teacher  
education curriculum, curriculum evaluation

\* School of Education, Utsunomiya University

\*\* Public Elementary School in Tochigi Prefecture  
(連絡先: marusan@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

言葉ばかりだったが、学んでいくうちにそれらの言葉の意味を理解することができた。

教育相談や特別支援教育に関する科目では、不登校や発達障害などの知識を得ることができた。これらの知識を得ることができたため、教員になって、実際に不登校や発達障害の児童と向き合うときに、構えずに接することができた。最も参考になったのは、「カウンセリングマインド」を学習したことである。学校現場では話題になることがとても多い。児童と過ごす休み時間や年に数回行われる教育相談、保護者と話す家庭訪問や個人懇談、何か揉め事があった時には時間をかけて双方の話を聞くなどというときに、相手の話をまずは受け入れることが大切であると講義で聞いたことが大いに参考になった。

## (2) ボランティア活動と教育実習

ボランティア活動や教育実習では見るもの、体験するものすべてが新鮮で、今でも鮮明に覚えている。宇大には、学習支援等の教育ボランティアの派遣先を紹介してくれるスクールサポートセンターがある。私も2年次後半から、同センター紹介により小学校で学習支援ボランティアに取り組んだ。ボランティア活動では、公立小学校の授業を参観でき、教師が教えている姿を見たり、学習が苦手な児童に教えたりする経験ができた。

教育実習では学習指導案や教材を作り、実際に授業を行うことができた。最も有意義であったのは、失敗できたことである。初めての授業で緊張し内容を忘れてしまったり、児童が静かにならず困ったり、多くの失敗経験により教師が行う授業を参観する際の視点が変わったように思う。教師のどのような働きかけがよいのか意識して参観できるようになった。

教育実習やボランティア活動を行うなかで教員になりたいという気持ちも強くなり、講義や教員採用試験の学習にも一層意欲的に取り組むようになった。

## (3) 卒業論文作成

3年次になり、ゼミを選び、自分が研究したいことを探る演習に参加してから、自発的に疑問をもったり、調べたりするようになった。

私は、外国人児童生徒教育に関心を持ち、本を読んだり、適応指導教室でボランティア活動をしたりして、母語や母文化を学ぶことは児童にとって大切なのではないかと考えるようになった。

卒業論文を書く頃になると、他の地域ではどうなのか、実際に母語や母文化を大事にしているところはあるのかをさらに知りたいと考えるようになり、大阪府や愛知県の小学校に連絡を取り、インタビューに出かけた。それまでは本やインターネットで調べることはあっても、現地を訪れ、インタビューする経験はなかったので、一つのことを深く学ぶことはとても面白く充実感を得ることができた。

また、ゼミの仲間は自分が意識していなかったことに問題意識をもっており、異なるテーマに取り組んでいた。資料探索、現地調査等、熱心に探究していく姿に感化され、私も行動的になった。

## 3. 教員生活

### (1) 1年目：余裕なく日々の授業・活動に従事

初任の勤務校は、児童数約400名、教員数約30名の中規模校であった。東日本大震災の翌年のことであり、震災被害を受けた校舎は改修工事のため、プレハブの教室に案内された。思い描いていた教室風景とは異なったが、どんな児童たちと過ごすのか不安と期待を抱き、新学期を迎えた。

教職1年目は第3学年34名を担当することになった。初めて児童と出会った始業式、着任式はとても緊張し、とにかく笑顔で過ごすことだけを考え、あつという間に1日目が終わった。

児童とは可能な限り一緒に遊び、話をするのを心がけると、関係を築けているように感じた。

しかし、学校の日課では、朝会、避難訓練、縦割り班活動、運動会練習など、日々の活動・行事に追われ、1日をこなすことで精一杯だった。教科指導においても、次の日に教えることを確認したり、ワークシートを作り、印刷する作業を放課後から夜8時頃までかけて行っていた。学年主任や初任者指導教員にワークシートを作ってもらったり、教え方を相談したりすることができ、大変有難かった。

その際、単元を見通して計画を立てることを教えてもらったが、翌日のことを考えるだけで精一杯で、その大切さになかなか気付けなかった。

こうした状況では学級経営が上手くいくはずもなく、学級は騒がしくなっていき、思うようにならないことに落ち込み、指導教員に弱音を吐くこともあった。指導教員は「1時間、授業を任せて」と言って、学級活動の時間を担当した。教室の後方で授業を参観していると、指導教員は児童にワークシートを配り、今の

自分の姿を○×で振り返らせた。点検項目は「チャイムの合図は守っていますか。」「授業中、おしゃべりはしていませんか。」「先生の話最後まで聞いていますか。」など、学校で守らなければならない当然のことばかりであった。しかし、できて当然と思うことができていることに児童たちは気付いた。また、私自身も徹底して指導できていなかったことを反省した。

さらに、指導教員は「1時間の授業で5分無駄にすると、1日で30分無駄になる。1週間だと150分」と話した。児童たちは1時間の授業を真剣に受けなければならないことにも気付いた。その瞬間から学級の雰囲気明らかに変わり、規律ある授業が行われるようになった。ある男子児童は、チャイムが鳴ると「チャイム鳴ったよ。席に着いて」と学級全体に呼び掛けるようになった。私も「～さん、チャイムの合図をしっかりと守っているね」、「～さん、授業の準備がばっちりだね。」等、児童に注意を促すより褒めることが多くなり、学級の雰囲気も、児童同士の関係も、児童と私の関係もよくなった。

こうして1年目を無事に終えることができた。本当に、あの1時間で、児童も私も変わることができた。指導教員には心から感謝している。

## (2) 2・3年目：学校運営への関与

「学級経営には『黄金の3日間』が大切であり、学級開きの3日間で1年間が決まる」という話は1年目を終えようとする頃に知った。そういう話を大学生の時に聞いたかと思った。「今年こそは!」と思い、本をたくさん買って学級経営について学んだ。3日間で、1年目に指導教員から教わった時間の大切さを話し、守らなければならないことを徹底して指導すると、その後の学級経営や授業が上手くいくようになった。本当に3日間だったかは分からないが、始めが肝心ということがよく分かった。

また、学校行事の1年間の流れが分かり、学校行事のおおよその内容は変わらないので、行事の準備を先輩教員に聞かなくてもできるようになり、私自身余裕がもてるようになった。

2～4年目は、年2回、校長、副校長、学年主任に授業を参観してもらい助言を受けるという研修がある。また、要請訪問（各学校の研究課題に沿った授業を実施し、市教育委員会指導主事の指導を受ける）の授業者になり、自分で考えた学習指導案や教材を職員研修で先生方と検討し、練り上げていくことを

経験できた。学習指導要領を読んで、他学年との関連を確認し、単元終了時に身に付けさせたい能力を考えたりしたことで、単元を深く理解することができた。それらの経験を通して、単元計画を作ることの大切さに気付き、他の教科でも、新しい単元に入る前に計画を立てるようになった。そうすると、授業の流れが分かり、スムーズに進行できるようになった。さらに、児童とも単元の1時間目に「学習計画」を立てるようにしたことで、今日までやってきたこと、今日やること、明日やることの整理が付き、学習に意欲的になった児童が増えたように感じた。

3年目には、初めて第1学年を担当することになり不安を感じていると、ある先輩教員に「1年生には時間をかけて一つずつ丁寧に教えていってあげれば大丈夫」と言われ、気持ちがスッと楽になった。丁寧にとはどういうことかと考え、1時間のなかで行うことを計画しておくことにした。

例えば、ロッカーの整理の仕方を教える際には、黒板に絵を描いて示し、実際にやって見せて、児童にも取り組ませてみる。必ず言葉で説明するだけにならないようにした。国語の教科指導では、音読→読み取り→友達と音読→新出漢字の練習。算数では、0～5分フラッシュカード、5～10分導入、10～15分自力解決、15～25分練り上げ、25～35分練習問題やまとめ、35～45分かけ算九九暗唱テスト、などと計画しておく、児童も手持無沙汰にならず、授業がテンポよく進んだ。児童も授業の流れに次第に慣れていき、自力解決する時には集中して考えるようになり、発表にも意欲的になった。

そして、校務分掌ではクラブ活動や算数科主任など任されるようになり、学校運営に携わっていることを実感し、やりがいを感じるようになった。

## (3) 4年目：学級経営へと視野が広がる

単元計画の立案や日々の授業準備に割く時間が少し短縮でき、教科指導に余裕ができたからか、学級経営に興味を抱くようになった。

それまでは、係活動やお楽しみ会など最低限のことを教師側が提案し、児童に話し合ってもらっていた。毎回同じような話し合いになることを改善したいと先輩教員に相談すると、「係とは別に、みんなのためになることを自由に提案したり、制作したりする活動を取り入れると、楽しんで活動するようになる」と話してくださった。そこで、それを実践し

てみることにした。

実践開始の当初は、口を挟みたくなかったが、我慢して見守っていると、休み時間にも集まって相談したり、「学級のみんなにアンケートを取りたい」と相談に来たりして、子どもたちだけで学級のみんなが楽しめる企画を次々に考えていった。児童中心で学級を作ったり、学級をまとめていくことで、児童が充実した学校生活を送れるようになったと感じた。

また、放課後は先輩教員の教室を見て回り、掲示物や黒板、ロッカーの整理の方法など、さまざまな観点から教室環境づくりを学んだ。参考になるものがあればすぐに実践し、分からないことは先輩教員に質問した。先輩教員は皆とても親切に教えてくれた。ちょっとした工夫で、児童が学びやすくなったり、学級での居場所を見つけられたり、やる気になったりすることが分かった。

#### (4) 5年目：初めての異動

5年目に初めて勤務先の異動を経験した。学校規模は児童数約600名、職員約40名で、初任校より大きく、職員の名前を覚えるだけで大変だった。若手教員も多く、教職5年目の私が第4学年副主任になった。職員会議は聞き漏らさないよう今まで以上に注意して話を聞いた。学校の雰囲気や地域性、行事等が異なり、毎日カルチャーショックを受けた。

学級数の多い学校では、同学年での連携が大切で、何をすることも足並みを揃えることに当初は戸惑った。しかし、隣の学級も同じことを行うことは児童も保護者も安心するのだと思う。また、自分一人で考えていた教材も学年の先生方に相談するとよりよい案が生まれ、以前に作った教材を改善して使用することができた。校内研修では一人一授業という研修があり、同僚に授業を参観してもらうことになった。

また、教職3年目から算数同好会に参加した。同好会でも若手教員の参加者が増えてきたことから、若手の学習指導案を検討してもらうことになり、校内研修用の学習指導案を検討してもらうことにした。同好会では、ベテラン教員や宇大附属小学校教員が行った授業をビデオで撮り、それを見て検討することが多く、どの授業も研究されたもので、教科書に頼った授業とは異なり、毎回大変参考になった。

私の小学校教師としての力量形成に関する省察は以上のとおりである。今年は教職6年目に入るとともに、産休を取得することになった。出産・育児を

経験すると、教師としての教育観も変化するという。職場復帰する際、自身の経験を児童指導、保護者との応対に生かしていくことができれば、と願う。

#### 4. まとめ

筆者（丸山）は、これまでに平野の授業を二度見学したことがある。一度目は初任時の年度末であり、二度目は教職就職4年目の年度末であった。初任時の時には日々の授業の準備に追われていると語っていたが、4年目のときには「苦手な教科の単元計画が立てられるようになり、見通しをもって授業づくりに取り組めるようになった」と語ってくれた。明らかに教師としての力量が高まっていることがわかった。3年の間にどのように変化するのか、ぜひ整理してほしいと思い、今回、平野に自身の力量形成に関して振り返ってもらうことになった。

平野の場合、大学時代に学んだことに関する記述よりも教職就職後に学んだことに関する記述のほうが量的に多く、やはり教職就職後に学んだことのほうが多いように思える。

しかし、大学時代に学んだことも確実に意味もっていることもわかる。専門用語や基礎的な概念のように時間をかけて、染み込むように定着していくこともあれば、不登校や発達障害に関する事項のように教職就職後すぐに効果を発揮する知識など、有効性は一様ではないと思われるが、高等学校卒業生は教職入職までの間に確実に変化していく。

卒業生へのアンケート調査では、卒業生の教育観や教職に対する意識の変化にも留意してアンケート項目を作成しなければ、変化を的確に掴み取ることはできないことを改めて考えさせられた。

付記 本稿は、日本学術振興会科学研究費「教員の職能形成に資する大学教員養成カリキュラムの実証的研究」(16K04454, 代表・小原一馬)の助成を受けて作成したものである。

#### 参考文献

- 1 山崎準二『教師の発達と力量形成 ―続・教師のライフコース研究―』(創風社, 2012年), 姫野完治『学び続ける教師の養成』(大阪大学出版会, 2013年), 藤澤伸介『『反省的実践家』としての教師の学習指導力の形成過程』(風間書房, 2004年) 他。

平成29年10月31日 受理



# Elementary school teacher's reflection on professional development

Tsuyoshi MARUYAMA\*, Sayaka HIRANO\*\*

\* School of Education, Utsunomiya University

\*\* Public Elementary School in Tochigi Prefecture